

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 ヴィエイラ アマロ ベビオ

本研究は戦国時代から近世にかけて成立するキリシタン施設について、港市長崎という具体的な場を舞台として実証した都市史的・建築史的論文である。従来長崎の都市形成については断片的に残る日本側の資料、近年少しずつ進められてきた考古学的知見などで、一定程度の事実は解明されていたが、それらはキリシタン側の資料を十分に踏まえたものではなかったし、考古学的な知見もまた都市長崎あるいはキリシタン施設の成立という観点から総合的に位置づけた形跡がなく、いまだその全体像は明らかになったとはいえない状況であった。

本論の著者は日本側の資料（記録・書簡・画像など）はもとよりキリシタン側の膨大な資料（書簡・記録等）の悉皆的調査を行い、さらに現時点で判明している考古学的な成果、さらには建設工事のさいに記録された地質情報など、およそ入手可能なあらゆるデータを収集し、GIS（地理情報システム）に統合して長崎とキリシタン施設の形成過程というかたちでまとめあげた力編である。論文は先行研究を整理し、本研究の方法論と論点の独自性を示した 1. **Introduction and main objective** と 全編の内容から抽出される結論を述べた 10. **Conclusion**、本論の分析に使用した各種資料を一覧した 11～16 の附録を除くと、2. から 9. までの 8 章が本編となっている。

2. **Historical context** では 3. 以降展開されるキリシタン施設復元分析の歴史前提としてイエズス会の誕生と海外布教進出、進出先で行った宗教儀礼や教会、コレジオ、セミナリオ、修練院、住宅などの諸施設の基礎情報が与えられる。

3. **Development of Christian architecture in Japan(1549-1569)**ではイエズス会が日本布教に乗り出した初期の状況が分析される。イエズス会は当初日本の伝統社会から強い抵抗を受け差別されるが、いったん布教の内容が伝達できれば比較的円滑にキリスト教の教えが受容されることになる。当該期に横瀬浦に建設された建築のなかで種別が判明する 42 例で、18 例が新しく建設された教会であり、住宅を教会に転用した 11 例、寺社を教会として利用した 7 例を加えると比較的スムーズに教会建設あるいは既存建物の教会利用が実現していった経緯が理解できる。この時代、まだ長崎は成立していない。

4. **Early Christian Facilities in Nagasaki Port (1569-1587)**は続く 16 世紀の第二期のもっとも重要な都市史的变化は 1571 年に港市として長崎が成立することである。この章は都市長崎の成立とともに長崎の具体的な場におけるキリシタン施設の成立を諸資料、考古学

的知見、地質データ、絵画資料などを駆使して GIS のなかでその立地を復元している。この時期、イエズス会はヴァリアーノが来日しており、彼の指導力によって長崎 6 町はもとより長崎の先端部におかれたキリシタン関係施設の推定配置が示されている。

5. **Cemeteries and crosses** では長崎におかれた墓地と十字架の位置が復元され、6～8 では、それぞれ 3 章にわたって、豊臣秀吉期（1588－99）、1600 年～1613 年におけるキリシタン施設の発展期、そしてキリシタン禁止令によって上記のキリシタン施設が取り壊されていく徳川幕府期（1614－1620 年）の状況が明らかにされる。最後の 9. **Strategies and policies adopted by the Society of Jesus in regard to architecture** では上記までの章で扱ったキリシタン施設の変遷を総括してイエズス会の布教戦略の各時代の特徴をまとめている。この分析のなかできわめて興味深い事実が解明されており、初期キリシタン施設はできるだけ日本の仏教との差を明示的にしめそうとしていたが、長崎が成立し 10 年ばかり経過した 1580 年ごろからイエズス会は次第に日本の伝統的な慣習を取り入れたかたちの布教を進めていく。その融和的な戦略が功を奏し、1600 年以降はむしろヨーロッパ的要素が一举に広められることになる。すなわち 1600－1613 年の期間は長崎が一举に西欧的な教会都市として彩られた珍しい時期であったといえる。徳川幕府は厳しいキリシタン弾圧を布いたため、長崎の教会都市としての姿は 1614 年以降急激に失われていくことになる。

以上、本論は既往の研究蓄積をはるかに超えた膨大な資料群にもとづく都市史・建築史研究であって、その内容は従来指摘されたことがほとんどない、著者独自の見解が随所に示されている。ここで再現された 16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけての長崎の形成・成立・変容とキリシタン施設の変遷は画期的な成果として高い評価を与えることができる。すなわち本論は、従来の長崎研究はもとより都市史研究全般において新境地を拓いた研究であり、博士（工学）にふさわしい業績と評価することができる。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。